〈彙報〉

平成七年度　国文学科活動報告

文学遺蹟めぐり
―明日香・藤原宮跡見学―

日　時　平成七年五月十一日（木）
行　程　長堀駐車場（集合・点呼）―川原寺前下車―伝飛鳥板蓋宮跡（解説）―蘇我入鹿首塚―安居院（飛鳥寺）―石舞台古墳（見学・昼食）―藤原宮跡（ロマントピア藤原京）見学―難波（解散）
対　象　国文学科一・二年生全員

持統四（六九四）年、都は飛鳥浄御原宮から藤原（橿原市）の地に遷された。折しも藤原宮跡では創都一三〇〇年を記念しての博覧会が開催されていた。今年度の遺蹟めぐりは、飛鳥古京散策とロマントピア藤原京見学として実施した。川原寺前から飛鳥寺まで「明日香風」のなかを歩き、石舞台で昼食・休憩の後は、藤原宮跡へ。藤原京館・萬葉館などのパビリオンや植物園などを自由に見学。飛鳥の土を踏み、藤原京の時代を体験することのできた有益な一日となった。

国文学科講演会

日　時　平成七年六月二十七日（火）第三・四時限
会　場　南港学舎講堂
講　師　皇學館大学学長・文学博士　西宮　一民先生
演　題　「泉」と「出水」
対　象　国文学科一・二年生全員

国文学科では、毎年の行事として学外の国文学国語学の先生をお招きし、専門の分野のお話を伺っている。本年は、皇學館大学学長の西宮一民先生にお願いした。講演は「『泉』と『出水』」という題で、国語学のお話であった。複合語の語構成を考えるとき、前項が動詞の場合、連用形もしくは連体形で後項に続くのが一般的であるのに、「イヅミ」は、終止形となっている。これは、国語学の大きな問題の一つであったが、先生はこれを「イヅルミ」の「ル」の脱落と考えてよいことを明快に語られた。話の合間に、「坂は照る照る」と「照る照る坊主」の話が出たが、実はこれが問題解決のヒントであった。講演は、専門的で難解な部分もあったが、国語学的な思考法に触れる事ができ、有意義であったと思う。

国文学科芸能鑑賞―文楽―

日　時　平成七年十一月九日（木）
　　午前十一時開演
場　所　国立文楽劇場（大阪市中央区日本橋1―12―10）
演　目　双蝶々曲輪日記
　　堀江相撲場の段・大宝寺町米屋の段・難波裏喧嘩の段・八幡里引窓の段・橋本の段
対　象　国文学科一・二年生全員
　　国文学科専任教員・助手

今回は文楽「双蝶々曲輪日記」を鑑賞することにした。一種の演目を、四時間近く観せることに多少の不安を覚え、学生全員に床本を配付しての鑑賞となった。

眼目の一つとされる「引窓」は、小道具〈引窓〉を十分に生かして見事であった。公演開始当初には、床本ばかりを眺めていて人形を観ていないのでは、と思われる学生も中にはいたが、それはそれ、浄瑠璃は「聞きにいく」ものだとも言う。今回の鑑賞をきっかけとして、普段は馴染みの少ない文楽に、少しでも興味を持ってくれれば、と願ってやまない。

平成七年国文学科ゼミ活動報告

〈柿谷ゼミ〉
日　程　七月十六日（日）
　　祇園会、山鉾町巡行見学

〈北谷ゼミ〉
日　程　九月一日（金）・二日（土）
　　萬葉ゆかりの地を訪ねて
　　―富山市・八尾町・高岡市―

〈鳥井ゼミ〉
日　程　九月八日（金）・九日（土）
　　金沢・石川近代文学館方面

〈橋本ゼミ〉
日　程　九月十三日（水）・十四日（木）
　　本居宣長と斎宮（三重県松阪）

〔十月三十一日現在〕

彙報

今年度、本学において次の学会が開催された。

和歌文学会第五十七回関西例会

日　時　　四月二十二日（土）午後二時より

場　所　　相愛女子短期大学　厚生施設棟小ホール

発表題目　一、古典享受と和歌―『徒然草私註』を中心に　　光華女子大学　松田豊子氏

二、『五代簡要』についての一考察　　福岡女子大学　今井　明氏

三、和歌色葉奥書再読―上覚と長房兄弟―　　梶山女学園大学　黒田明子氏

なお、研究棟貴重展示室においては、春曙文庫展観（午後一時～四時）を開催した。

仏教文学会本部例会

日　時　　一月二十日（土）午後二時より

場　所　　相愛女子短期大学　厚生施設棟小ホール

発表題目　一、『今昔物語集』の出典と用字法　　京都橘女子大学　藤井俊博氏

二、『発心集』数奇説話への一視角　　大阪府立大学　田中宗博氏

三、漱石と禅――明暗雙雙――　　相愛女子短期大学　鳥井正晴氏